

〔海外研修施設の視察報告〕

「国際看護学海外研修」実施予定大学の視察報告

吉村裕之, アダラー・コリンズ・慈観, 真鍋瑞穂

人間環境大学松山看護学部

(依頼原稿)

本学部では、「広い視野と国際感覚を身に付けた看護職人材を育成すること」を目的に、カリキュラム上、国際看護学を一年次と二年次に必修科目として開講、さらに二年次の夏季休暇を利用して国際看護学海外研修を選択科目として開講している。令和元年9月から一週間の海外研修先に、タイ王国ラチャブリ (Ratchaburi) 県にある Borommarajonani College of Nursing Ratchaburi (BCNR: と略) が国際看護学担当教員から候補として提案され、相手校の了承が得られた。そこで、平成30年11月20日から24日まで現地に赴き、立地環境、宿泊施設、実習病院、研修内容などを視察した (写真1, 3)。

### 1. 予備折衝と準備

国際看護学の選択科目という位置づけであるので、慈観教授がBCNRとの連絡と折衝を行った。タイ王国のチュラロンコーン大学およびマヒドン大学との学術交流の経験がある吉村教授および国際交流委員の真鍋助教が同行することになった。

### 2. BCNRまでの旅

11月20日松山空港から伊丹空港を経て関西国際空港に辿り着いたが、翌日、早朝便のため関西国際空港隣接のホテルに前泊した。11月21日の午前11時発なので午前8時前にチェックインカウンターに到着。その後、出国手続き等を終え、タイ航空TG623便にて出発。同日、午後3時45分にタイ国際空港に到着した。午後6時半頃に大学からのバスと案内役の先生の出迎いで、ラチャブリまで移動したが渋滞、途中で食事休憩 (なんと、鴨料理のレストランであったので、メコン川の濁流を思い出したが、加熱処理されていた) したが、ホテルに着くまでに腹痛が起きないか不安であった。約3時間かけて大学が紹介してくれたS.Swissホテルに到着すると、部局長 (Director) や国際交流担当の教授達が出迎えに来ておられ、来訪の挨拶を交わした。バンコク市内からラチャブリ市内までは、鉄道もあるようであるが、誰も勧めないことから、確実性と安全性に問題があるように感じた。海外研修の学生達の場合も、大学のマイクロバスで宿泊先のスイスホテルに直行するのが最善と思われた (写真10)。

### 3. 大学訪問

大学の住所は、83/21 Kathathorn Road, Muang District, Ratchaburi 70000, Thailand.

となっており、日が暮れてから到着したので周辺が分からなかったが、翌日、三人で朝食後、付近を散策すると、1ブロック (約1~2分) も行かずにBCNRの校舎や付属施設の場所を確認することができた。その後、ホテルに戻り、着替えて待機した。ほどなく、BCNRからの送迎バスがホテルに到着したので、BCNRに行き (ごく近くであったが……)、会議室に案内され、下記の意見交換会を行った。会議室前の廊下には、創設者である前国王の母上が看護師であり、その方が尽力されて創設されたことから、大きな肖像画と祭壇が設けられていた (写真4, 11)。

### 4. 意見交換

会議室にて、部局長のPhenchamat Khamthana教授から歓迎の挨拶があり、数人の先生方を紹介された。最初に両校および病院の紹介がDVDを用いてなされた。タイ政府厚生省傘下の看護大学校 (College of Nursing) は全国に40以上あるが、ベスト5内の歴史と実績があるとのことであった。その後、慈観教授から、視察の目的、国際看護学を選択した学生の海外研修などが説明され、国際看護学の授業科目で実施予定の海外研修であり、外国の看護師養成教育と病院実習に触れさせたいとの説明がなされた。BCNR側では、国際交流を担当しているDr. NongnuchとDr. Meebunmak先生が窓口となることが述べられた。

Dr. Nongnuch先生は、来日経験も数回お持ちであり、マヒドン大学で学位を取得され、英会話も堪能な才媛であった。BCNRでは、現在、中国とスウェーデンから研修生を受け入れているが、短くても4~6週間の滞在で、本学部のように3~4日間だと内容をどうするのか、煮詰める必要があること、9月は諸外国と同じように、タイでも新学期にあたり多忙な時期と重なるので3月は可能か、いずれにしても講義や実習の見学調整が必要になることが指摘された。希望する9月は盛夏であるので極めて蒸し暑いこと、3月ならやや暑くなり始めの季節だと説明された。タイでは、一般的に9月に入学して新学期を迎えるため、

日本と同様に多忙なことも話された (写真2, 7).

### 5. 病院実習と地域看護学実習の見学

BCNRの学生が実習を行っている病院は、大学校舎から歩いてすぐの距離にあり、外来受付の混雑ぶりにもかかわらず、病院関係者の出迎えを受けたのち、病院長達と面談することができた。西洋医学以外にも伝承医学的なアプローチも行っているとのことであった。各病棟や薬剤部、リハビリ用のタイマッサージなどを見学と体験をした (長旅の足の疲れが約20分のフットマッサージで癒されました)。また、印象的であったことは、病棟で患者に薬物を渡すときの説明を看護学生が実習で行っており、ベテラン看護師がその説明をチェックしながら補足説明を行い、薬理学教育もかなり実践的にされていた (写真5, 6)。

翌日は、大学のバスでコミュニティー・ナーシングを実践しているコミュニティーを訪問した。ちょうど、Nongnuch先生 (地域・在宅看護) が担当されている村を訪れると実習の学生グループが出迎えてくれ、極めてスムーズに打ち解けることができた。最初は、自宅で寝たきりの高齢者のケアであったが、村人がボランティアとして支えており、行政担当職員・看護教員・看護学生達 (4人/グループ) とがチームとなり、非常にうまくサポートできていると感じた。のどかな農村部であったが、ボランティアと看護師 (看護学生も含めて) との協調がとれていて、生活費や治療費などの問題があればその地域を担当する厚生省の行政職が関与するシステムが機能している印象であった。日本と異なり、高齢者のための施設が普及しておらず、健康障害のケアだけでなく日常生活や公的資金の適用申請まで看護職が支援活動をおこなっており、各村のボランティアにリーダーがおられ、村人達が支え合う構造が印象的であった。

次のケースは、寝たきりの痴呆が進行した患者であったが、御主人も事故骨折で移動が困難、年配の娘さんが両親の世話をする家庭であった。ここにも村のボランティア三～四人が担当されており、行政職が家屋 (物置小屋のような建物) の改造を支援し、患者の寝る場所の確保と移動可能なようにしていた。書類による申請ではなく、看護師の報告に応じて、実際に行政職が患者の住む場所を調査して、患者の過ごしやすい住環境に改善していることに日本

との差を感じた。学生達も明るく優しく接しており、さすがに「微笑みの国」であった。看護学生は礼儀正しく、また、教員とのコミュニケーションが非常に良く取れていた。Nongnuch先生は、このような村を5～6か所担当されており、村人達から信頼されている様子が印象的であった。休憩時には住民たちが作ってくれた伝統的な菓子 (もち米を蒸した甘いチマキのような物) を出してくれ、実習生達と談笑しながら、食べた。日本の学生達が、このように村人と看護師とが支え合い、看護職と行政職が一丸となってケアサポートする現場を見ることは極めて大事ではないだろうか。村人が生活しているのだから、動物も飼われていたが、衛生面と安全上、接触することは避けた方が良いと考える (写真8, 9)。

### 6. 帰国

11月23日、地域・在宅看護の現場を視察後、お世話になった先生方とお別れをして、運転手付きのレンタル・マイクロバスでバンコク国際空港近くのホテルに向かった。バンコク市内から国際空港までの高速道は政府要人 (開催されていたOPEC参加か?) が通過するために厳戒態勢で大渋滞が起こっており、結局、ホテルには九時半過ぎに到着した。もちろん、レストランは開いておらず、明かりを頼りに食堂を探す羽目となった。翌日、バンコク国際空港から関西国際空港、そして新幹線、JR岡山駅で乗り継ぎ松山に戻ったが、国際線の発着時刻と入国審査の混雑を考えると、この経路は疲労困憊することを身をもって体験した。

### 7. 海外研修に向けた懸案事項

BCNRは、教育実施病院が大学に極めて近く、附属施設であるので学生が学ぶ場として、適していると考えられる。実施時期が、カリキュラムの都合上、前期末から後学期開始までとなると、多くの外国の大学が9月に新入生を迎えるので、3月が好ましいと思われる。また、バンコク国際空港 (Suvarnabhumi International Airport) からラチャブリのBCNRまでの特急バスの利用を検討するなどを検討せねば、参加学生の人数によっては大学のマイクロバスでは移動が難しくなる。学会活動や地域連携活動も活発に行われており、教員による国際交流も相互に実施すれば実り多いことを実感した。

*Inspection report on arranging co-operation for student's visit in BCNR of Thailand.* Journal of Nursing Science in Human Life, 2:37-39 (2019). Hiroyuki Yoshimura, Jikan Adler-Collins and Mizuho Manabe (Working group for training international nursing course, Faculty of Nursing Sciences at Matsuyama campus, University of Human Environments)





写真1



写真2



写真3



写真4



写真5



写真6



写真7



写真8



写真9



写真10



写真11